

洋学史に関する一考察

——渡辺崋山を中心として——

大 月 明

【要約】 渡辺崋山の洋学研究の性格を、研究を始め、進めていった環境と、その成果である「西洋事情御答書」「慎機論」「猷舌或問」から考察した。特に、彼の洋学研究が、洋学史上盛行期に入る天保期にあつて、その学問観・倫理観の上に研究の成果を組立て、政治論・社会論を展開している事、及び彼の洋学研究の結果としての批判精神を、質的な相違はあるが、洋学史上、むしろ主流外にあつた司馬江漢の後をうけるものとして考えてみた。戦後の洋学研究は、沼田次郎氏の「幕末洋学史」を始めとし、岡村千曳氏の「紅毛文化史話」、佐藤昌介氏の諸論文、あるいは諸藩の洋学、洋学資料の発見等、多くの成果があげられている。かかる先学の業績に導かれ、洋学史の二三の問題点を考え、かつ、洋学史の一つの流れとして、洋学研究の成果によつて、それぞれの立場から政治・社会を批判した人々の中より江漢・崋山、特に崋山をとりあげ、その洋学研究に就て考察を加えたのである。

秀れた画家であり、熱心な洋学研究家であり、憂世の藩重役であつた渡辺崋山を論じた著作は甚だ多いといわねばならない。特に、藤田茂吉氏の「文明東漸史」^①以来、「蜚社の獄」を洋学者・洋学研究家への思想的学問的弾圧とみ

て、崋山をその犠牲者の中心人物とみる事から、「蜚社の獄」への評価の多くが崋山個人の評価に加味されるきらいなしとされる点も出来てきていた。然しながら、森銑三・菅沼貞三氏等を始めとする多くの研究家の努力は、森氏の「渡辺崋山」や菅沼氏の「崋山の研究」^②、美術史の面からも、菅沼氏・吉沢忠氏、あるいは蔵原惟人氏等^③による秀れ

た研究が生み出されたのである。ところが、華山の洋学とその性格に就ては鮎沢信太郎氏等の若干の研究の他、あまり多くをみない。これは残存資料の乏しい事もあるが、思想史の方法による華山の洋学、洋学を求め影響をうけた華山の思惟方法にふれられる事が、美術史の面に比して少なかったといえよう。それはまた洋学の名で概括される外来文化受容の歴史を評価する仕事の困難さと未着手の面の多い事、更にいえば、従来「洋学論」として論議され、「洋学史」としての総括的集大成に未だ至っていない状態、そして「洋学論」で論議される、洋学史を書上げる方法論にも未だ多くの問題が残されているといった事等に関連して、華山に就てもその全貌を解明する仕事に更に多くの研究対象たりうべく、残されているといえよう。^④最近、佐藤昌介氏が次々と華山、あるいは蚕社の獄・洋学論に就いての新しい見解と知見を加えられている事は、ひとり華山のみの問題にとどまらず、「洋学論」への多くの問題を提起し、「洋学史」への道を数歩前進せしめるものといえよう。私もかつて先学の驥尾に附して甚だ稚拙な考察を行い、近世思想史の一節としての華山の評価を行つたが、今更に

先学の成果をふまえて華山の洋学からの影響に就ての若干の考察を行いたいと思う。

註

① 明治十七年九月出版。自序に「本史ニ於テ余ハ最モ渡辺華山高野長英等ノ事跡ニ力ヲ用ヒタリ是レ微意ノ存スルモノアルニ由ルナリ」とあり、外篇として「渡辺登伝」を収む。

② 菅沼貞三氏「華山小伝」（『華山の研究』所収）は秀れた伝記的研究である。

③ 吉沢忠氏「渡辺華山」（日本美術史叢書）蔵原惟人氏「渡辺華山の思想と芸術について」（『世界八七・八八号』）等。

④ 村井益男氏「洋学論」（『新日本史講座』）「洋学の全歴史的評価は従来のごとく洋学自体の縦の繋がりにからする評価に代り、その時代時代によつて当該社会との横の関連の中において先ず為さるべきであり、また洋学者中心、思想中心の研究から、むしろその外延部分をも含めての研究に重点が置かれるべきではないだろうか。」という提言に賛成するものであるが、洋学の全歴史的評価——洋学史の基礎作業として、思想史の方法で洋学・洋学者の歴史的評価を綿密に、あるいは社会との横との関連の中においてなす事も必要であろう。

⑤ 佐藤氏は蚕社の獄、華山の洋学の再評価を行い、華山の洋学にみえる絶対主義的性格、即ち寛政改革を契機として以後、富国強兵策の技術であると同時に、絶対主義体制の理論的基礎となる幕末洋学の先駆的存在として華山の洋学を意義づけ、華山らの弾圧は幕末洋学の形成過程におこつた悲劇として捉えられ

ている。「渡辺崋山の洋学研究と蜜社の獄」(文化十八の一)、「蜜社の起源とその実態」(日本歴史六九号)、「渡辺崋山自筆本『外国事情書』その他について」(史学雑誌六四の四)、「蜜社の獄の真相」(日本歴史九二号)、「洋学の権力隷属化に関する一考察」(日本歴史百五・百六号)

⑤ 拙稿「化政・天保期の思想史的一考察、渡辺崋山の場合」(人文研究四の九・五の十)

二

華山の洋学研究に関する考察を行うに先立ち、彼の洋学受容の内容を考える背景として、化政・天保期に至る洋学受容の歴史の一端を問題史的ではあるが一つの試論として述べてみたい。

洋学の発達は新井白石によつて準備され、徳川吉宗の奨励によつて全盛期に至つたといわれる。が、むしろ事実的にいえば、和蘭通詞達によつて準備され、主に医学・天文学の洋学者によつて全盛期に至つたといえよう。洋学受容の先達、和蘭通詞達の洋学の内容がたとえ体系的なものではなく、洋学一般よりは蘭語が目的であつたにせよ、西吉兵衛・嵐山甫安・檜林鎮山・今村市兵衛・本木榮之進・吉雄

幸作・志筑忠次郎・吉田自庵・栗崎道有等の通詞・医師達が、その後の発展の基礎を築いていた功績は明らかである。^⑦

徳川吉宗の洋学奨励も、程度と内容に問題こそあれ通詞達の洋学・蘭語の研究が先行していたという歴史的基盤の上に立っているものであり、初期の著しい蘭癖ともいふべき異国趣味的な傾向を作つた物質的ルートも、まづその多くが通詞達を経たものであらう。然して吉宗の与えた洋学発達への刺激が、通詞や一部和蘭流医師の間のみでなく、洋学への興味を多くの階層間にもたらしていく端緒を与えた点に於ては大なる意義があるといえよう。

その洋学観に就ては従来よく論じられた所であるが、中根条右衛門玄圭の暦学振興の為に禁書を解禁されたいとの建議を契機として禁書解禁となり、生来の天文学・数学等の趣味にもまして当時の社会の要求する新技術の摂取、例えば農事暦の重要性から強調される天文学の奨励ともなるのである。吉宗の新しい技術・物産への興味は、未知のものへの興味もあらうが、幕府財政・封建制農業一般からの強い現実的な要請を基礎とするもので、その西洋文化移入

も体系的ではなく当時として可能なあらゆる面にわたっている事も周知の事実である。^⑨この新しい学問・技術の移入に対する吉宗自身の胸算用が採長補短、実学的なものであつた事は、その動機が学問的な洋学尊重論からでなく、実利尊重から出た文化移入と考えられる事からも窺えるが、「なまじるに学文せしものは、政事を委ねがたき事あるものなり。わきて長崎の奉行など、あしく心得れば唐をのみ尊く思ひあやまることあり。すべて書を読人、おほくは唐を好み、ややもすれば国体を失ふ事出来るものぞと宣ふ。国産の薬物などひろくもとめさせ給ひ、異域の薬種をあまた培養せしめられしは、もし洋船通ぬことありとも、国人の病用に事かかせじとの御旨なりとぞ。」^⑩といった学問観、あるいは実利を尊ぶ政策からも窺えよう。それは外国文化に対する吉宗の感覚でもあつたろうが、享保七年十一月には、「自今新板書物之儀、儒書仏書神書医書歌書都て書物類其筋一通之事は格別、猥成儀異説等を取交作り出し候儀、堅く可為無用事」、及び「権現様之御儀は勿論、惣て御当家之御事板行書本、自今無用ニ可仕候」事が命ぜられている。武士階級の自覚意識と倫理観の振興を目指した吉

宗のこの思想統制策も学問観と密接に結びつくものであり、また徳川家を頂点とする幕藩体制の直面する現状に対し、異域の技術・物産の取入れを断行した配慮の裏付けも着々と手がつけられているともいえる。禁書解禁に始まる吉宗治下の洋学はかくて、青木文蔵（「和蘭文訳」）、野呂元丈（本草学の和解）を中心として洋学プロパーの発達の基礎作業が着々と進められたのである。

吉宗の実学実利尊重の立場から取入れられた洋学の影響は、政策社会現象の面で享保期の継続発展とみられる「田沼時代」に至つては、特権商人層の経済的富裕と大名等武士上層部の奢侈を背景に、洋学に附随する物品を珍奇な物として重宝視する好事家を多く生んでいる。^⑪平賀源内の数奇な生涯の一端に代表される、学問研究的というより、甚だ美学実利的な、むしろ和蘭渡りの品物として稀小価値をもてはやされる商品的存在の面も強く出てきた。その間にも、青木・野呂以後の洋学研究は決してその量の大きさを誇りうるものではないが、天文学・医学・本草学を中心に、藩医、藩士、あるいは庶民出身の洋学者を加えて研究を進めているのであり、地方でさえ、洋学というよりやはりそ

の新奇さへの興味からか、洋学のアランが存在するに至つた事は司馬江漢の「江漢西遊日記」にもみえているところである。特に注意されるのは、西川如見が早く「儒者、医者、歌道者……多くは町人の中より出来る事になりぬ。」と指摘した如く、徳川時代一般に庶民出身の学者が比較的に多くなつていくのであるが、その中でも元禄・享保から

田沼時代にかけて最も多く、また京・大阪を中心とする畿内及び西日本の出身者が江戸方面東国の出身者より多いのである。^⑧ 洋学者・研究家とみられる者でも、中根玄圭が京都の銀工、青木昆陽は魚屋の子であり、橋本宗吉は大阪の傘屋、間大業が質屋、伊能忠敬が酒屋の養子であり、木村兼霞堂にしても大阪の酒造業者であり、西川如見も長崎商人の子であつて、庶民出身者が少からず活躍している。世襲による社会的身分の安定、ある意味では他の職業に転ずる事に於て不自由な武士階級に比して、比較的自由な立場にある庶民階級から、また畿内を含む西日本から多くの学者、洋学者を出している事は、経済的文化的に先進地域である地方を中心とするだけに注意すべきであらう。然もその後の彼等の地位は多くは登用されて幕府の天文台その他の

にあるという事である。特にこの場合洋学者に於てそうであるとするなら、吉宗以後の洋学プロパーの発達と影響が庶民出身の洋学者まで生むようになった事と共に、注意すべき状態であるといえよう。

この時期、宝暦以降明和・安永期、つまり「解体新書」翻刻に始まる本格的洋学勃興期には、本木良永・志筑忠雄によつて初めて地動説が紹介され、麻田剛立・高橋至時・間大業等は直接蘭書により天文学を研究、前野良沢の「翻訳運動法」によつて物理学の最も早い業績が示され、医学では「蘭学事始」に苦心をかたる「解体新書」の翻刻が前野・杉田玄白等によつて、成就されている。それらの中でも農業と密接に係る暦法と関連して天文学が早く取上げられた事は前述の如くであり、貞享暦・宝暦暦の改補はその成果であつたが、後一時振わなかつた天文学も、宝暦末明和に至つて、いづれも通詞である本木・志筑等の輩出から再び洋学の中心的地位を獲得、明和元年、吉田秀長が天文方となり、翌年江戸牛込に天文台を復興、四年後に「修正宝暦甲戌暦法」十冊を献上する。^⑨ この天文台の復活は、後の幕府の洋学摂取の総本山蕃書調所の母体であり、

天文学が幕府御用学としての性格をこの時期に更にはつきりさせているといつてよからう。洋学史研究の難点の 하나는その内容の難多な事であるが、その主流は天文学・医学、そして兵学である^⑧。その天文学の中心存在が幕府におかれた事は、即ち高橋・間等の天文学が大阪町人社会の産物としての出発から、天文学者としての発展はかえつて天文方となつてから大成されていく事^⑨も加えて、当時の洋学の存在が、洋学及び洋学者の發生の萌芽をかなり多く庶民階級の中にもちながら、その生長大成を幕府天文台の中でみなければならなかつた事は、新しい学問受容の基礎が、杉田玄白のいう儒学的教養である事からの身分の限定という問題を除いても、幕府の官吏通詞によつて出発、吉宗によつて機会を作られた受容の経過をそのまゝに、まづ天文学がその存在の中心を幕府御用学とするようになったのであり、後の洋学の發達の上にも大きな影響を与えているといえよう。何故、庶民出の天文学者が庶民の間でその学問を大成させていかなかつたかという当時の社会の限界も注意すべき問題であらうが。

こうした享保以降天明期に至る洋学の發達は、いわば勃

興期にあつたといえよう。この時期の研究は「蘭学事始」にみえるような苦心を数重ねたであらうし、また幾多の俊才をいろんな階層から生んだ事も前述の通りである。更に天明年間には語学入門書として大槻玄沢の「蘭学階梯」をみるようになり、一層の發展を容易にする手段もふえてきていた。そこでは、吉宗の胸算用の外に立つてとにかく洋学を求め親しむ者が増加してきており、成果をあげつつあつたのである。この勃興期の洋学の性格につきいろいろ論じられているが、將軍吉宗の抱く胸算用——実学実利の尊重が洋学の進歩への大きな刺戟であり、また実際に洋学の成果の上に於てそうした性格をみせる面が多かつたとしても、国内の洋学研究には各階層の人々が熱心に當つていた事も事実であつて、その線まで吉宗の実学論、新井白石の形而下論が規制制約しているか否かはあまり問題とならないのではない。問題は、白石あるいは吉宗の外国文化論の意義は決してそれだけに終るものではなく、むしろ特に後の支配層間の伝統的な見解に成長する重要な因子を含んでいるが、洋学プロパーの發展は實際そうした点に制約されずに展開する様相をみせており、洋学に對する單なる受容

観にとどまらない積極的な統制論を展開させてくる時期は少しおかれてあるのではないか。^④庶民層から幾人かの俊才を生み出しながら彼等を庶民の間で育てえない社会・経済の状態、好むと好まないにかかわらず生活と研究の場を幕府、あるいは諸藩に求めねばならない状態、まづ天文学にみた幕府御用学として自己の学問を定着せしめていく動きが、勃興期ともいふべき時期に既に現れつつある事等の分析が必要となるのではないか。洋学の勃興期にあつては、洋学・洋学者の実態を究明する仕事はまだ残されているともいえよう。

医学にしても、南蛮医学は寛永以後急激に勢力を失い、外科のみその卓越さを誇り、林道春もそれを認めたが、沢野忠庵の「南蛮流外科書」は、ほとんどそのまま元禄九年「阿蘭陀外科指南」として刊行されたといわれ、南蛮外科たる彼の門弟等はそのまま阿蘭陀外科と称して伝えられ、ガスペル流と合流して生命を持続した通り、その技術内容^⑤はともかく伝統と研究は古くから伝えられ、洋学研究発展の素地の一部となつていたといえる。この医学が「解体新書」翻刻をへて後のシーボルトの基礎的教育によつて大き

く発展するのだが、寛政三年、松平定信が多紀氏の躰壽館を医学館として官立とし、五年には外科学がおかれて当時洋学界の巨頭桂川甫周が教授となるのであり、安政五年に至つては、伊東玄朴・戸塚静海・竹内玄同・伊東貫斎・坪井信良・林洞海が侍医となり、内科が採用されている。^⑥勿論、天文学等と異り、診察治療の点から民間にある町医の存在も大きいのが、多くの藩医も加えてみると、天文学の天文台と並んで、医学も官立の医学館、あるいは幕府の侍医、藩医の占める比重が大きいのである。

佐藤昌介氏は、寛政改革の思想弾圧が、勃興期洋学の姿を権力奴隸化の方向にもつていつた大きな契機であつたとされる。^⑦この見解には私も賛成である。つまり勃興期をへた洋学の発達は、寛政期に至れば決して軽視すべきものではなく、洋学としての質と量を充実させてきているのである。松平定信がその洋学観に、「蛮国は理にくはし。天文地理又は兵器あるは内外科の治療、ことに益も少なからず。されどもあるは好奇之媒となり、またはあしき事などいひ出す。さらば禁ずべしとすれど、禁ずれば猶やむべからず。況やまた益もあり。」と述べている事からも、学問として、

またその影響の輕視すべからざる成長を洋学がとげている事は明らかである。享保期とはその内容も機能も影響も大きな差を生じている。定信は、「只篤実に御為を心得、初めにいふごとく、政道を正しく臣民を撫育し、文武の道を厚く心懸て御為を心とするを精勤とはいふなり。我猿智恵に慢じて何かと位にあらざして建議処置の論をいうは、実に盲言にしてかへつて御為ならざること也。よくよくつつしみ……かの君子は国を患ふるの心あるべし、国を憂ふるの語あるべからずといへる……」^④と、処士横議、政治批判を「御為ならざること」として否定している言葉と合せ、強い洋学の影響への警戒の裏に、洋学の影響から政治批判の生れる可能性を定信が掴んでいたと想像出来るのである。

桂川甫周が医学館教授となつた寛政五年には、聖堂学寮を幕府家臣の学所となし、林家は代々大学頭として文教的行政に与り、思想統制、出版検閲その他官選圖書の編纂を行うようになる。^⑤他方、北辺露国の進出による対外策として、寛政十一・二年頃から蝦夷地測量事業が始められ、天文台は享和三年以降の「ラランデ曆書」翻訳を続けつつ、

幕府の命で洋書翻訳を行つてゐる。文化五年には、若年寄堀田正敦より天文方に対して洋書の取扱方を命じ、かつ翻訳の技能ある者を録上せしめているが、文化頃からは、英・仏・露・満語の研究も行われ、いわゆる「蘭書訳局」が天文台に設置されるのである。^⑥吉田秀長の天文台復活以後文化年間に至つては、幕府洋学の中心として洋学者の登録、基礎的な語学研究にまで及んでいるのであり、幕府のみならず洋学発達の中心的存在の位置を強化しているといえるのである。文化八年、馬場貞由に命ぜられた「シヌメル」八巻の訳述——「厚生新編」の訳述事業が何時まで行われたか不明であるし、原書の主表題である「財産を殖やす多くの方法と健康を保持する方法とを蒐めたる家事辞書」が実生活に寄与したかどうかはこの稿本が未刊であるだけに疑問である。^⑦然しながら、大槻玄沢を始め、宇田川玄真・大槻玄幹・宇田川榕庵・小関三英・湊長安・杉田立卿・青地林宗等、洋学者の中心的存在の人々がこの業に当り、少くとも天保年間頃までは忠実な翻訳が続けられていたのであつて、この事業を通じて、直接間接に洋学者がこれまでの学力の充實を基礎に、主に語学力であつたろうが、更に高

い実力を増していつたことは容易に考えられ、また幕府によるかかる事業に於て、玄沢以後陪臣ながら訳官に登用される等、洋学者のえた社会的地位の意義も輕視出来ないものであつた。こうした幕府保護下、天文台を中心とする洋学による外来文化研究が幕府の手から野放しのものでなかつた事は、定信の見解、一連の文教策からも知れるところであり、寛政改革の思想統制が洋学の進路を政治的見地から幕府の洋学として、また絶対主義体制支持の学問としても幕末洋学に連なる道へ進まざるをえなくせしめているともいえるのである。洋学者、然もその中心人物の一人大槻玄沢からさえ、次の如き言を聞くと、当時の洋学者達自身、洋学の影響を無視しえなくなつてゐる事も、洋学の実学としての存在・成立が何処に於て可能であり、あつたかを物語つてゐるともいえよう。即ち、文化八年、「シヨメル」翻訳下命後、堀田正敦の下問に答えて、和解御用役所の建設による翻訳の実施・薬方製煉・物産類植物等の種蒔等・地理学算術・物産本草之学・医学療治等の翻訳研究を建議し、「己れ己れが名を釣り術を売り候助け而已にて、世之俗人を惑し欺き候者多く相聞得、大に人民之害を招き実学之者

迄も譏りを起させ候事不少様に相見得申候、依て右御役所御免被相建候上は、右体無実之空談申散し候者天下一統え堅く御制禁被仰出、医術天地を始め何に寄らず阿蘭陀有用之実学に志し御座候者は、此御役所へ申出吟味之上可為相許、右も無之自分に右様之事申唱候者は急度可為曲事など御触出し等」と述べてゐる。文政年間にも「当時はまだ世人が少しも西洋の事情を知りませぬから、蘭学すると云へは切支丹でもするやうに思はれて……人に知れないやうに竊に学び」といつた状態が一般にはみられたが、原三代による洋学者出身別の表によると、全国で明和・安永期に十八名であつたのが、寛政・文化・文政期には八五名、天保・弘化期には三四五名の多きを数え、特に天保・弘化期はほとんど全国にわたり、また原氏がこの期の算出に使用された、伊東玄朴の象先堂入門者総数の半数（三五六名中一七九名）を武士が占め、然もその出身分布が全国的であり、六十藩の藩士一三八名を含んでいる。天保期以降、社会の要請は諸藩をも含めて新しい学問への要求度を高めた事を示すと同時に、その成果の影響が如何に發揮されたかは別問題としても、量的には、明和・安永期の勃興期を

へて寛政・化政期に増加、天保以後更に増加している事はそこに寛政期に於ける幕府の対洋学策強化の遠因を認めうるし、制約された洋学に対する要求も幕藩体制崩壊の過程に比例して、増大しているのである。「蒙先堂塾へ入門した人々は皆医者計りでなく有司の子息など蘭学を学だ者も少くなかつた。」^⑩という。幕府自体にとつても洋学研究は必須のものとなり、他方洋学者の増加は洋学者にとつても幕府にとつても従来と異つた新しい問題となつてきていたのである。

こうした洋学者の数的増加を背景に寛政期以降の洋学界の動きは推移し、洋学者自身による洋学の幕府御用学化が説かれるに至るのである。ともかく寛政以後、幕府を中心としていろいろの施策が行われたが、「正確なる国土の測量、天文学的地点確定に必須なる学問は江戸京都の天文方と諸侯配下の二三学者の掌中にありしなり。」^⑪といった状態も実状に遠いものではなからうし、「公辺より蘭学の字書などが出ましてもそれは秘書とか何とか申して、世間へは出ませぬ。それを種々困苦して写」す苦勞を一般の研究者に与えている事も事実であらう。が、天保期に入つては

洋学者の数的増加と共に、「漢学なれハ漢学、蘭学なれハ蘭学と、専門に不仕れハ、いづれも未熟に相成候て出来不申候。世間大ニ此学相開け候而、往時馬場佐十郎位之学者ハ珍らしからざることに相成申候」^⑫ほどに進んできたのである。

かかる洋学の發達の中心をなしたのは天文学・医学であり、洋学及び洋学者の主流といえよう。ところが、定信は洋学プロパーの効用を「益も少なからず」と認めたが、「好奇之媒となり、またはあしき事などいひ出す、」とその影響を警戒している。大槻玄沢も「名を釣り、術を売り……世之俗人を惑し欺き」害を与える者を指弾している。天保十一年の事であるが、売薬看板蘭字使用禁制^⑬があつたが、そうした類いの事もあつたであらうし、また洋学者の態度に、いわば主流にある洋学者その他からみて目に餘るものがあつたのかも知れない。研究のみに専念する洋学者にとつて、洋学研究から政治・社会批判に進む人々もまた名を釣り、あしき事等いい出す者として排されたのであらう。従来そうした人々として平賀源内・司馬江漢・本多利明・山片幡桃等があげられていた。平賀源内は「業は本草家に

て生れ得て理にさとく、敏才にしてよく時の人氣に叶ひし生れなりき。」あるいは「蜀山云、実学はとても出来まし、本草学は可惜事也。」とも「誠に学問の邪魔をなせし当世俗学の元祖なり。」とも評される本草学・物産学者であつた。ところが彼は二度長崎に遊んでいるが、蘭書を読むには至らなかつたようであり、思想や学問の方法の上に於ける洋学の影響はほとんど認める事が出来ないといわれる。

これに對し寛政・化政期に活躍した司馬江漢は洋画家としても有名であるが、「狐狸ノ人ヲ惑ス者多シ、嘗テ蘭人ノ話ニ、彼国ノ狐狸不_レ為_レ怪、惟日本ノ狐狸怪ヲナス」という洋学の影響による合理思想は「仏書悉く不思議奇妙を以て誌せり」と排仏論にも至つてゐる。「貴賤上下共に学ぶべき者は聖人の道なり、ただ論語大学を幾遍もくり返し読むべし。」とするのは當時としては当然でもあろうが、「支那及びわが日本究理の学なし」という合理思想は広く世界にも向けられてゐる。中華思想を排して「中央ニ不当ノ邦ナシ」とし、「おらんだは人類に非ず獣の類なり」の言に對し「人は獸に及ばず」と応酬してゐる。彼は更に西洋の社会制度に及び、「和蘭通船」では自己の才能を十分に発

揮出来る社会設備の完備した自由な世界として画いてゐる。「上天子將軍より下士農工商非人乞食に至るまで皆以て人間なり。」と述べ、人間の欲望も肯定した彼の思想は、やはり自由な新しい理想郷である西洋社会を洋学で知る事によつて大きく影響されてゐるのである。が、それにとどまらず、「下をしひたげ、民これが為に困窮す、竟には動乱起れば、必外国其虚を窺ひ来らん、遠き慮りなき時は必近き愁あらん。」あるいは「人君は天職なり、今の君は人君ありての人民と思ひ、驕慢の心發起して土民を視る事草芥の如し、」といった政治批判に及び、「天下に才ある者といへど、農夫商工の家に生るる時は卑賤なりとして之を用ひず、諸侯貴家に生るる者は才なしと雖も之を用ふ」不合理をつくのである。彼にあつては洋学から得た知識を、地理学・天文学等といった単なる知識の集合物にとどまらせなかつた。洋学から知つた西洋社会の文明、一つの理想図であつたかも知れぬが自由な世界の知識は、自己の社会との対比となり、上述の如き烈しい思想となつて流出するのである。ラクスマン・レザノフ来航に関しても幕府の政策を非難、魯国との通商説にまで至つてゐる。晩年、「予

昨日まで酔つて今日醒めたり、……一生は一睡の夢、覚むる時は亦夢^⑧といった虚無思想に陥つたが、彼の政治・社会批判によつて、当時の社会を動かすには未だ多くの時日の経過を必要としたのである。押せども動かぬ現実の壁とのたたかひに疲れた彼は、「死は実なり、生は虚なり^⑨」と嘆ずるのである。山片幡桃の「スベテ人ノ徳行性質ハコトニ於テハ古聖賢ヲ主トシテ是ヲ取ベシ。天文地理医術ニオイテハ、古ヘヲ主張シ、是ヲトルモノハ愚ナリト云ベシ。」や、後の「東洋道德西洋芸術^⑩」の思想に連るものを江漢が有している事は明らかであるし、前野良沢門下の彼も語学力はあまりなかつたといわれるが、その政治・社会批判は洋学の主流がやつと全盛期に入つた時期に現れた点に於ても出色のものといえよう。この江漢が、寛政五・六年頃から桂川甫周・大槻玄沢等、いわば主流の蘭社連から離れ、本多利明やその周辺の人に近づいていつたといわれる^⑪。とにかく当時致々として洋学一筋に勉強している蘭社の人々の間では評判がよくなかつたらしいが、彼の政治・社会批判に対する危険人物視、洋学を好奇之媒とする者と考へての排斥であつたろう。また「大槻玄沢と言ふ人は

……頃日、タバコの起源の書を引きて、皆漢文なり。タバコは多くの愚人卑賤の好む者にて、故に此書は、世の嘲弄ものとなりぬ^⑫。」といった批判は玄沢を怒らしたであろうし、桂川甫周の「漂民御覧記」誹謗は烏有道人の「盲蛇」による反論となり、「彼が人となりをさくに、天性愚にして、頗る奸黠なり。……鼻先の才気ありて、和漢蘭学諸先生にもおりおり出入し、其論説を見過し、聞過し、自ら得たりとして世に誇り、其業を嚮ぐの助となす。」と嘲けられ、玄沢自筆の「腕港漫録」中にも収められているという^⑬。ここに前述せる文化八年、玄沢俗牘の「名を釣り云々」の言葉を思い出すのである。勿論江漢一人を組上のせたのではあるまいが、江漢の痛烈な政治・社会批判その他の言動を、他人の論説の見過し、聞過し、自ら得たりとして世に誇つてゐるにすぎないとする蘭社連の考え方は、玄沢のそれでもあるろう。洋学研究の主流をいく洋学者として、洋学を他の働らきに援用、政治・社会あるいは洋学自体を批判する事を「人民之害を招き実学之者迄も譏りを越させ候事」として排するのである。江漢の考え方は、洋学プロパーの発展自体を直接促進しえないであらうが、絶対

主義体制への傾斜にある時期とはいえ、本来近代国家の科学である洋学を前進せしめる營養劑は江漢の如き現実社会への批判という社会への働きかけから得る事にある。が、科学として、社会・経済の発展の中から自生的に生れた学問と異つて、学問としての全的な展開を洋学に望むのは無理である。然して洋学者としては主流からは離れたいわば傍流の座を占めた江漢の思想は、科学本来の歴史的な姿としては洋学プロパーの発達と共にあるべきものであつたろう。

洋学に関して深い知識も有せずして甚だ性急な私見を簡単にまとめたが、尚今後の研究にまちたい。唯、かかる展開をとげたと考える洋学の発達の流れの中で、華山の洋学研究を如何に捉えるかが次に述べる問題であるが、私は江漢にみた思想の働き、洋学の影響とその消化の伝統を、質的には異つた点をもつているが華山の洋学研究とその成果の中にみる事が出来るのではないかと思う。

註

⑦ 「蘭学事始」に「通詞の輩も只かた仮名の書留等までにて、口づから記憶して通弁の御用も弁ぜしにて年月を経たり。」と

あるが、正徳以後は南蛮語（葡・西語等）が廢れ、蘭語研究が主となるという通詞の語学が口伝のみとは考えられず、やはり正徳以後は読み書の事も行われていたろうとされる。高槻未知生氏「和蘭通詞の蘭学史上の地位と功績」（歴史地理四十の六）、高橋嶺一氏「洋学論」、「長崎と海外文化」下編等参照

⑧ 齊藤阿具氏「徳川吉宗と西洋文化」（史学雜誌四七の十一）

⑨ 有徳院御実記付録、卷二十

⑩ 御触書寛保集成、書籍板行等之部

⑪ 「蘭学事始」に「世人何となく彼国持渡りのものを奇珍とし、総べて其舶来の珍器の類を好み」とある。

⑫ 「町人叢」

⑬ 辻善之助氏「日本文化史Ⅵ」

⑭ 大槻如電修「新撰洋学年表」

⑮ 新村出氏「蘭書訳局の創設」（史林一の三）

⑯ 板沢武雄氏「日本とオランダ」（日本歴史新書）

⑰ 土屋元作氏「新学の先駆」

⑱ 佐藤氏「洋学の権力隷屬化に関する一考察」

⑳ 「外科万辨類編序」（羅山文集卷五十）に「西域之技術及外国之藥石、流落於中華者古分有之、則亦可兼用者乎」とある。

㉑ 海老沢有道氏「切支丹の社会活動及南蛮医学」

㉒ 呉秀三氏「和蘭流外科に就いて」（史学雜誌三三の二）初期の技術はたいしたものではなかつたようである。「和蘭医事問答」参照

- ②③ 富士川游氏「日本医事年表」（『日本医学史』所収）
- ②④ 佐藤氏「洋学の権力隷屬化に関する一考察」
- ②⑤ 「字下人言」
- ②⑥ 「閑あるあまり」
- ②⑦ 大久保利謙氏「日本の大学」
- ②⑧ 「通航一覽統轉卷五四」によると文化六年以後、英・露語研修が命ぜられ、斎藤阿具氏の「ゾーフと日本」によると、仏語をゾーフから教わっているが、これは長崎の事であろう。「蘭書訳局」は「蛮書和解御用」等とよばれているのを新村氏が「蘭書訳局」の名で統一された。番書調所の前身である。新村出氏「蘭書訳局の創設」参照
- ②⑨ 「厚生新編」（昭和十二年複製本）、板沢武雄氏「厚生新編訳述考」（『史学雑誌』四三の八）
- ③⑩ 佐藤氏「洋学の権力隷屬化に関する一考察」
- ③⑪ 「蘭訳梯航」後付俗讀二通の第二書（『盤水存響』乾）
- ③⑫ 伊藤圭介述「シーボルトの話」（『名家談叢』第九号）
- ③⑬ 原平三氏「蘭学発達史序説」（『歴史教育』十一の三）、沼田次郎氏「幕末洋学史」、岡村千曳氏によると、寛政時代の洋学者番付二種を比較検討してみると、三年間に卅一名の洋学者が増加しその出身地もほとんど全国にわたっている。（『紅毛文化史話』）
- ③⑭ 伊東玄泰氏談（『伊東玄朴伝』所収）
- ③⑮ シーボルト「日本」（呉秀三氏「シーボルト先生其生涯及功業」所収）
- ③⑯ 伊藤圭介述「シーボルトの話」

- ③⑰ 小関三英の天保五年九月十日付書翰（山川章太郎氏「小関三英とその書簡」文化五の三・四・六・七・八）
- ③⑱ 慎徳院御実記卷四
- ③⑲ 「蘭学事始」
- ④⑰ 平賀鵬溪実記 卷三
- ④⑱ 尾藤正英氏「江戸時代中期における本草学——近代科学の生成と関連する面より——」（『東大教養学部人文科学紀要』第十一集）私も洋学の影響は間接的には考えられるが、直接的に源内の思想や学問の方法に影響を与えたとは考えられない。唯、全く影響外にあつたとはいえないと思われる。拙稿「平賀源内の思想に関する一考察」（『人文研究』六の九）

- ④⑲ 「和蘭天説」
- ④⑳ 「春波楼筆記」
- ④㉑ 「和蘭天説凡例」
- ④㉒ 「春波楼筆記」
- ④㉓ 「春波楼筆記」
- ④㉔ 「夢之代」
- ④㉕ 佐久間象山「省魯錄」
- ④㉖ 岡村千曳氏「司馬江漢とその和漢画」（『紅毛文化史話』）
- ④㉗ 「春波楼筆記」
- ④㉘ 岡村氏「前掲書」

三

華山が洋学に近づいた動機は画業からであり、文化十二

年廿三歳の時の日記、「寓画堂日記」に「蕃書見」とあり、恐らく画業に關係ある図譜類のものであつたらう。丁度谷文晁に就て画業一筋に勵んでいた頃だが、この日記の中には宿痼に悩む吉田長淑を十二年一年間で十回訪問している。吉田長淑は駒谷と号し、桂川甫周に洋学を学んだ内科医で、高野長英・小関三英の師であり、後の華山と長英・三英との交友には何らかの役を果した人ではないかと考えられるが、画業の上からの洋学への接近もさる事ながら、吉田長淑との交りも、それに就て具体的なものを未だみないが、華山の洋学接近を助けたと想像される。

岡村千曳氏によると、小関三英が世話になつた桂川甫賢とも画友として親交があつたらうとされている。^②従つて華山には画を通じ、洋学者を通じ文化末年頃から洋学に親しむ機会をもつていたといえよう。三宅友信の「華山先生略伝」^③によると、卅歳（文政五年）の頃から画風が変り洋画の手法をとり、肖像画に妙であり、また卅二歳の頃から洋学に心を傾けたが原書を読まず、高野・小関の訳言を聞き編冊を作つたという。この友信の追憶は、洋画の技法に親んだ点ではやはり文化十二年頃からといわねばならないし、

高野・小関の訳言を聞いたのも卅二歳の頃からとはとらな
いのが妥当で、高野・小関とは天保初年頃からの交際であ
らう。ともかく友信の記憶により、文政後半卅歳頃から洋
学の影響が著しく顕在化してきた事は肯定出来る。華山の
洋学が具体的にはどんな文献からえたものかに就ては勿論
残存する史料も少く、全貌をうかがいえずが、華山全集に
収められた「客座録（天保乙未）^④拔萃」「客坐掌記丁酉拔
萃」中にみえる洋書の覚書、蘭書目録あるいは天保九年蔵
書を藩公に献上した時の「進書目録」中にみえるものがあ
げられ、更に「旧幕府引継書目」にみえる地理書を中心と
した書目がまとまつたものといえよう。もつとも客座録、
客坐掌記がいわばメモであるだけに内容も断片的覚書で、
蘭書目録も医学書が多く、「引継書目」のほとんどが地理
書であるのを除いて、熱心な知識欲以上にまとまつた志向
分野を見出しえない。唯、華山の勧めにより、「毎歳春長崎
の訳官阿蘭使節の貢物を江戸に献ず、爾時必ず阿蘭国書を
齎来れば……僕（友信）をして資を傾けて購はしめ、一室
蘭書充棟に及べり。」^⑤といつた有名な友信の蔵書を利用し
たであろうし、吉田長淑・桂川甫賢や應見泉石・松崎懺堂、

あるいは高野・小関等の友人から互に貸し借りる事によつて洋書に親しんだ事も勿論であらう。その内容は華山自身が洋学者としての研究を始めたのでなく、その初めも画業から入つただけに、内容は雑多なものであつたらうし、後述する如く華山の求めたのも虫譜その他画業に関係するのを除いても、まづ西洋を知らんが為の資料とするのを中心としてゐるだけに、彼にとつて可能な面に及んだであらう。が、中心となるのは、華山が「常に小関・高野の二氏を招き、地志歴史の類を読ましめ、」^⑧とあるように地理歴史の類であつたらう。

この華山の洋学が初め画業からの親しみであつたとはいへ、やがて地理歴史の方面へ入つていつた契機は何であらうか。海防と内政への必要からともいわれる。^⑨特に天保三年以降海防関係の職にあてられてからはその研究に拍車をかけたであらうが、小藩ながら田原藩が遠州灘と渥美湾にはさまれた渥美半島にある関係からも、当時全国的に盛んに論議された海防論を背景に、藩政に対し並々ならぬ熱意と策を抱き苦心した華山が、藩政の上からも海防を論じ策を講じた事は当然であつて、外国軍艦商船の形状及び旗幟

を画いて沿海の役人に渡し、藩士村上範致を高島秋帆門に入れ、あるいは鉄砲調練に力を注ぎ、「日本第一の武家と相成候積」と自負している事等にも窺えるのである。従つて華山の洋学研究を進めた契機として海防問題をあげえよう。また国産に関心をよせ田原に於ける海苔製造に力をつくすとか、大蔵永常・佐藤信淵を招き、その先進農業技術あるいは独自の農業経営策の藩内普及をはかつてゐるが、

その成果如何は別としても、藩財政の建直しは年寄役となつてからは特に彼に課せられた重大な責務で、理想的ではあつたが、一途な経済策に当つた事は、効果の上らない永常に対する不満等^⑩からも推測出来よう。そうした面からの要請が華山の洋学研究を意識的に更に進めた事もあらうが、具体的な現れはみられないし、内政面に関しては華山の洋学は西洋の実状を詳かにした程度で終つてゐるといへよう。やはり彼の洋学研究を質量共に前進せしめたのは海防問題、^⑪広くは勿論田原藩を含めた幕藩体制下の外交問題からであらう。こうした華山の洋学研究が画譜類からの画法摂取の為と思われる線から、交友の影響援助をえて程度を高め、蘭語を解さずともその内容の理解につとめその成果

をまとめあげるまでに至るのであるが、その経過の中で、
資力、図書その他の援助を与えた三宅友信の存在は高く評
価さるべきであろう。当時の蘭書蒐集の困難さは友信によ
り軽減されたであろうし、また高野長英に扶持を与えて小
関三英と共にその学力を提供せしめた事は、時期的には文
政末以後天保にかけて、華山の洋学研究の内容の質量増加
に大きな役割を果たしたと解する事が出来る。後には友信の
蔵書は洋学者間に有名となり、友信の巢鴨邸に集る人も少
なくなかつただけに、直接間接華山に与えた影響は強く、
彼の洋学研究は友信とその周辺を研究の中心的な場として
もつていたといえよう。

かかる華山の洋学研究の環境とその基礎が生み出した成
果、「慎機論」「西洋事情御答書」「黙舌或問」等の内容が
如何なるものであるかに就て、佐藤昌介氏は、彼の述べる
ところが封建制の補強を目的にしていたにしろ、その体制
の変革を不可避としたのであるから、かかる思想の創出契
機たる彼の洋学は、その限りに於いて、幕末洋学の先駆的
意義を担うものとされ、また彼の本格的な洋学研究開始を
要請した内政に対しても、実学重視、結局は実証的合理精神

を目指したものであつたと考えられるが、洋学的知識を実
踐化したという証跡は殆どないとされる。特に西洋文化優
越の原因を実学と実証的合理精神に見出した点に華山の洋
学の特質を見出されておられる事は確かにその通りであろ
う。然し今後の問題としてはそうした内容をもつ華山の洋
学が如何なる働らきをなしたか、華山の洋学受容の動機に
ついての躍進の原因が学問的というより政治的な意識が強
いとみられるだけに、受容後の歴史的評価の把握が複雑に
もなるであろう。「蛮社の獄」への評価、田原に於ける政
治・経済策等の評価と関連してみる事も必要であり、より
基本的には佐藤氏が江川家所蔵史料から求められたような
基本史料の発掘も必要であろう。私も華山の洋学研究の成
果によつて彼の洋学の性格の一端にふれてみたいと思う。

華山の学問観の一端を窺うものに、「田原藩学問所設立
に際し師範に関する立案」がある。案文であるが、師範と
して、「其身より人に及し候而、御教化を興し候基に付、
其身持は勿論」条理これあるように心得させていて、「近
世学問の儀、大抵訓詁詩文を精致候迄にて、所得を以て施
行致候もの無^レ之候間、実行第一に心掛候様教導可^レ有^レ之、

其内不忠、不孝、不弟の筋有^レ之ば、猶更少しも用捨なく督責可有之候事」とある。勿論「実行は第一の事に候得共、学問不^レ精候而は、施行も亦広からずして、御用立不^レ申候間、」という事は忘れていない。訓詁詩文を排するのでなく、ここにとどまつて実行の学問である事を忘れるのを排している。この実行の学問に関連して更に深く学者としての立場を掘下げた考え方として、学者としての儒者に対する不満を表明している。「唯是有^レ心者は儒臣、儒臣亦望浅ふして大を措き小を取り、」②「今の儒者は之を弁ぜざるのみならず、其望も甚だ浅く、己を捨て人を責め、心を捨て他馳する故に、其間私を生ぜざる事不能、凡そ人を正し世を救ふもの、己正しからずして如何可^レ致哉、ここに於ては、今の心学者、はるかに勝れ申候。」③と、克己修身的な理念にみちていて、まづ人間としての修練を重視している。儒者への不満であるが、彼の学問観の根本が窺えるし、また心学者が克己に秀れているとしている事も興味のある点である。④ともかくリゴリスチックな彼の学者論であり、学問論ではあつたが、

そうした心構えの上に於て、実行の学問を尊重せよとする精神主義の基盤は華山の根本的命題でもある。松平定信以

後、全国的に民治・生活と結びついた実学が各藩の藩校に影響を与え、幕藩体制の動搖と共に各藩の殖産興業の基礎となる傾向を増すが、田原藩も同様、経済の建直しには実学が必要であつたし、華山の場合には、実学尊重の基礎に強く克己修身の人間修養という精神主義をおいているのである。いわば実学は正に技術としての価値を強く認められ、「学問不精候而は、施行も亦広からずして」という事になるのである。

かかる華山の学問観、あるいは倫理観の上に、彼独自の政治観・封建制度観が組立てられるのであり、⑤洋学研究もまた同様である。「蚕社の獄」突発後、華山がもつとも案じた「つまらぬ草稿」⑥は、「三月中半紙に認上候事情某と申書、初稿にてあまり過激に付」⑦と述べている「西洋事情御答書」であつた。これは江川太郎左衛門の求めに応じ、「西洋諸蕃の事情を知るは、誠に今日の急務」と存じて書上げた草稿であるが、世界の地理とナポレオンまでの簡単な欧州の歴史を述べ、「身を治め人を治るを第一の任と仕候故、開才造士を専と仕、学校の盛なる事、我国唐山の及ぶ所に無^二御座^一候。」と、造士の道を説明している。かく

て「學術實踐を以て天地四方を審に致し、人を育し、国を
広め候間、今は地球中一も歐羅巴諸国の有にて無きは無
御座候。……唯其国を古来より不^レ失ものは百爾西亜と我
国のみに御座候。存出し候得ば、誠に心細き事に御座候。
然るに不^レ知者は井蛙も安じ、鴈鶩も一枝を頼候心持に御
座候。」「知れば則牖戸を綢繆せざるべからず。」と、特に
英露二国の接近を警告している。然して「先敵情を審に仕
るより先なるは無^レ之候。」と英露に就て述べ、更には「抑
西洋の可^レ恐は雷を聞て耳を塞ぎ、電を忌て目を塞ぎ候事
を第一の惡と仕候。」と万事理を窮る事を専務とする合理
思想に就て述べている。英露を先頭にした欧州の發展の基
礎に、華山は「開才造士、學術實踐」をおき、更に西洋の人
々の合理思想を恐るべきものとして指摘しているが、「開
才造士、學術實踐」を「克己修身、學術實踐」としてもよ
からう。「御答書」の後半は覚書風のものとなるが、「西
洋諸国無名の軍は興し不^レ申候間、何れにも名を正する事
を始と致し候」と、ナポレオンのエジプト征服の時には波
海の妨をあげたと暗に鎖国を論じ、「權地球に及候洋人は、
実に大敵と申も餘り有^レ之候事にて、何卒此上は御政庁の

御規模の広大を祈る所以也。」と結んでいる。草稿の簡条
書ではあるが、西洋諸国の進歩の状態を單に羅列してある
だけでなく、華山の思想を根底に、その得た知識を組立て、
鎖国攘夷の危険性を説き、それが為にも大敵である洋人の
進出に備えて幕府の御規模の広大を祈っているのであつて、
江川の依頼とはいえ、田原藩を越えたより高い場からの対
策を強調しているのである。

「慎機論」にしても、モリソン来訪とその打払い問題に
直接刺戟されて書かれたものとはいえ、その内容・資料は
「御答書」から遠く出るものではない。田原藩として「海
防の制尤嚴ならすんばある可らず。」「然れども、兵備は敵
情を審にせざれば、策謀の由て生ずる所なきを以て、地理、
制度、風俗、事實は勿論里巷猥談、戯劇、瑣屑の事、其浮
説信すべからずと云へども、見聞の及ぶ所を記録し置かさ
るはなし。」と述べている。この「慎機論」は未定稿で、
案の十分の二に足りないものではあるが、恐らく文章等か
らみて天保十年までに華山の得た洋学の知識を十分に使用
すべく計画されていたのであらう。その冒頭に、田原藩の
海防の嚴なるべきを説き、兵備に備え敵情を審にせんが為、

見聞の及ぶ所を記録しておいたという事は、華山の洋学研究の大きな促進剤が海防問題であり、その為にも地理制度風俗その他を記録して他日に備えた研究方法の一端が窺えよう。内容は前述の如く「御答書」と重複するところがあるが、特に杞憂に堪えないのは、鎖国であり、英露兩國の貪婪に名目を与える事になろうと案じている。在上の大臣、要路の権臣、儒臣「一々皆不痛不癢の世界と成れり。今夫如_レ此束手して寇を待たんか。」と痛憤はしているが、華山はその事への対策を述べない。唯、「凡政は拠る処に立、禍は安ずる処に生ず。今国家拠る処の者は海、安ずる処の者は外患、……徒に太平を唱ふるは固より論なし。」と、海船火技に長ずる洋人に対抗する海防論樹立を希求しているとみてよからう。華山の述べるところは、結論に於て明瞭さをかくが、西洋事情を述べる部分に於ては明確に制度・人種・芸術に就て述べ、「西洋諸国の道とする処我道とする所、道理に於ては、一有て二無しと云へども、其見る処の大小分異なきにあらず。是能彼を審にする者にあらざれば、盲瞽相象の如く、一尾一脚も象は即ち象なり。若し尾を撫て象を説かば、垂鼻長牙又いづくにあるや。」と

鋭い合理的な観察を下している。また「默舌或問^⑨」は、「慎機論」「御答書」を書く資料として重要なものであつたろう。勿論、これも簡条書畫書風であり、自己の好趣に應ずるものもあるが、それだけに内容も豊富で興味もある。その序に、「時勢則今非_レ古。故以_レ古議_レ今者、膠柱鼓琴……彼犀兕之革、可_レ以作_レ鎧、彼斯之革、可_レ以活_レ人。齊諸山海之著、不_レ厭_レ詠奇、非_レ寶以備_レ用者_レ乎。若夫当路重任読_レ之、有_レ審_レ其俗_レ而知_レ其變_レ、防_レ其微_レ而杜_レ其漸_レ、無_レ以演_レ此道_レ者_レ、余望外之幸也。」と「或問」の述べんとする意を語っているが、所謂警世の書というにとどまらず、「唯荷蘭貢使、親歷_レ荒外、的聞的見、是以而可_レ信矣。」といった実証主義的な感覚から、「夫貌髮驚眼之倫、侏離默舌之言、雖_レ不_レ足_レ伝_レ之風_レ之、君子不_レ知則已、知之則不_レ滯_レ於物、謂_レ徒好_レ博聞多識_レ也乎哉」と、まづ西洋事情を説き、特に当路重任の君子に知らしめようとしているのである。かくこれらの書の、書上げんとした意図そのものは、恐るべき発展をとげた西洋文化の基調の認識と、西洋諸国のもつ破壊力への警告であつたともいえよう。然し、その内容を窺えば断片的覺書風であるとはいえ単なる

西洋事情の紹介ではない。「或問」の成立が六年間の洋学者達の話を書留めたものであるなら、彼等と華山が話合つた事柄には、それを記憶し撰択して書とめようとする際、自己の社会に対する観察・反応を反映していよう。どれがそれだと指摘するのは難かしいとしても、そうした反映を考慮の中に入れて「或問」をみてよからう。恐らく華山がおしたのであらう傍点のある部分、ニーマンが江戸の町数・戸口その他の記録を問うに、「江戸の广大無辺なるを以て、誰知る者なければ学問に深切ならざるとて笑ひたりとぞ。」「独尊外卑自ら耳目を閉て、井蛙管見の弊風なく」あるいは「都爾格の人才識高明なれども必勝を謀ること克はず、学問上達を学び下学せず、此を以て秀才なる者は傲慢に流れ、平庸なる者怠懈なり、奇機を見て模倣せる事至て敏捷なれども、性沈実ならざる故、物を創始すること不能、此を吾国にて輕脳と云、されど其敏才は欧羅巴人の及ぶ所ならず、別て我江戸人の性質に的中せり。」また、和蘭で十日もかかる解体を日本では一日でしてしまうが、「大抵十日又十二日も掛り候、精細にするには眼精計りも十日計りかかるべし、……貴国の一日にせるは如何ぞや。」

等の部分には深く感銘をうけたのであらう。

華山の洋学研究の一つの成果であるこれらの著作の内容が以上の如きものであり、その結果が海防への警告であり、自己反省の域を出ないといわれる事があつても、西洋文化への適切な分析評価、実学の尊重、合理的実証的精神の恐るべき効果を率直に認め、武士上層階級・学者の腐敗を指摘、世界状況への速かな反応と判断を要請している事は注意すべきである。司馬江漢の烈しい社会・政治批判に比べ、己の思想の中に入入れ、組立て、自己の述べようとする論旨を整えていく点に於ては、江漢の理想国視的な撰取内容と異り、やはり一步進んだ段階をみる事が出来るのである。洋学者としてではなく、一人の藩重役として短い年月の研究から、いろんな制約により著書としての形をなさないものがあつたにせよ、それなりにともかく述べんとするところを明確にしているのは、やはり華山の洋学研究の出版、経過にはつきりした目的が存したからであらう。学問としては不十分ではあつたろうが、天保期という変革期の中にあつて政治社会批判の仕事（批判―反封建という事

ではなく）洋学研究という新しい立場から演繹している華山の思想は、司馬江漢の系譜に連るものであろう。

以下、特に尚齒会の洋学研究、あるいは「蛮社の獄」をへた華山の洋学研究にふれていく予定であつたが、紙幅も尽きたので別の機会に譲りたいと思う。十分に論旨を徹底せしめえなかつたが「蘭学にて大施主なり」といわれた華山の洋学研究の性格究明に就て上述の見解が幾らかでも役立てば幸いである。

註

- ③⑨ 岡村千曳氏「桂川甫賢の蘭学と詩書画」（前掲書所収）
- ④⑩ 「崋山全集第一巻」以下全集所収のものは単に巻数を示す。
- ④⑪ 「幕府引継書目」甲第十七「函町奉行書類十四」（京大国史研究室所蔵本）書目中全てが崋山蔵書ではないが多くがそうで、結沢信太郎氏が「渡辺崋山の世界地理研究」（歴史地理七九の一・二）にとりあげられ、現存書に就ては、「鎖国時代日本人の海外知識」で解説されている。
- ④⑫ 「崋山先生略伝」一巻
- ④⑬ 拙稿「化政・天保期の思想史的一考察」
- ④⑭ 「崋山先生略伝」一巻
- ④⑮ 佐藤氏「渡辺崋山の洋学研究と蛮社の獄」
- ④⑯ 文政元年正月一日、「上如」此御困難、各方も拙者も今より心

かけ候はば、御政道を扶植可^レ致道可^レ有^レ之……」（退役願書稿）と、友人等と誓い、特に年寄役に列してからの藩政回生策の実施に苦勞している事は全集所収の書簡にも明らかである。

④⑰ 拙稿参照。

④⑱ 天保二年の「馬琴日記」に、「当春中松前アツケン一件記録有之候はは借覧いたし度」とあり、広い意味での外交に意を用いていたようである。

④⑲ 崋山が真木重郎兵衛に送つた書簡（其四）に、「テッポー書も追々相集り、御下屋敷にては翻譯相成候」（二巻）とあり、渠嶋邸は田原藩の天文台的存在であつたともいえよう。崋山は文政十一年御側用人となり、友信付兼務を命ぜられている。

④⑺ 佐藤氏「渡辺崋山の洋学研究と蛮社の獄」

④⑺ 佐藤氏「渡辺崋山自筆稿本『外国事情書』その他について」

④⑺ 二巻

④⑺ 「慎微論」一巻

④⑺ 「真木重郎兵衛に送りし書簡其一」一巻

④⑺ 「守国日歴」一巻、九月十日条「夜字八、おゆり赤井祖母のために心学の講釈をす」、全集本に心字とあるのは心学の誤

（「美術研究」一〇七号所収の「守国日歴」による。）

④⑺ 笠井助治氏「近世城下町に於ける藩校の位置と学問教育に對する態度」（史学研究四一号）

④⑺ 田原藩の經濟に就ては、入交好脩氏「渡辺崋山」（經濟史学七輯）参照。

④⑺ 例えば「真木重郎兵衛に送りし書簡 其二」（二巻）に「私思

案には、兼て御話申候通、御勝手は第二番めに心得罷在候。……

尤どれよりなりとも極意は同じ事なれども、愚案は遅緩なる方、又無為の方、……今世の大名は、大名の力無之処、君侯は其名に泥み、家来は其害に苦み、上より下を察せず、下より上を察することなく、……然る上は時勢には、一向手を付不^レ申方可^レ然、何れにも貧乏にてツブレたる大名決して無^レ之、……其上子を思はぬ親はなく、君を思はぬ臣はなかるべし、教化次第にて、人心其本に反り可^レ申候。骨折は右にあるべし、」と。

⑧〇 「麴町一件日録」所収書簡 一卷

⑧① 「獄中より江川太郎左衛門に寄せし密書」一卷

⑧② 一卷、佐藤氏発見の「外国事情書」もあるが、今は全集本による。

⑧③ 一卷

⑧④ 一卷、「崋山の口書」(一卷)に、「私儀主人領分三州田原、

遠州洋中へ出張候場所にて、私儀海岸掛相心得罷在候に付海防手当は勿論、蛮国の事情に通じ、主人之輔翼に相成度心底」から天保三年頃より、長英・三英・幡崎鼎より追々聞いていたものを考訂、また蘭人の話等を載せ、付録として湊長安その他から聞いたニーマンの話を加えたもの。この「缺舌或問」の内容が、崋山が本格的に洋学研究を始めてからの蓄積だとすると、崋山の本格的な洋学研究が始められたのは天保三年以前、少くとも文政末から天保二年頃までにならう。

⑧⑤ 赤井巖三「奪紅秘事」

史学研究会 十二月例会

左記により十二月例会を開催いたします。多数御参集下さい。

日 時 十二月七日(土)午後一時～四時

場 所 京都大学楽友会館(市電近衛通下車)

講師演題 歴史家とその時代

服部之總について

司馬光について

未 定

奈良本辰也氏

外山軍治氏

田村満穂氏

political organization from the rule of consanguineal group.

Disquietude of the Spirit of Renaissance

—Struggle between two cultural spheres and outlooks on the world—

by

Mitsuaki Nagai

Free from the general interpretation, we are going to clarify where the disquietude of ideas from the fifteenth to the sixteenth century came from, and how humanism, the world-outlook of literary republic Firenze, in the cultural sphere of Rome adjusted itself to and struggled against the penetration of logical and pragmatic world-outlook of Padova-Averroism originally Arabian in the cultural sphere of River Po. In the very point exists the disquietude of the Renaissance spirit, and the close contact of Firenze with Orient broke the balance between two cultural spheres.

A Study on the History of the Western Learning (洋学)

—chiefly about the case of *Kazan Watanabe* (渡邊崋山)—

by

Akira Ôtsuki

Here we treat *Kazan's* (崋山) environment, in which he began and developed his study, and his laborious works *Seiyojiijyo-okotaegaki* (西洋事情御答書), *Sinkiron* (慎機論), and *Ôzetsukimon* (駄舌或問) in order to explain the character of his study on the western learning. We have a special concern about his study's systematization based on his view of learning and ethics and his argument on the politics and society in the *Tempo* (天保) era when it was the better times of western-learning history, and about his critical spirit, as a result of his study on western learning, in spite of their qualitative differences, inherited from *Kokan Siba* (司馬江漢) who was out of main current in the history of the western learning.

Many works on the western learning have been published in the post-bellum period, such as *Bakumatsu-Yogakushi* (幕末洋学史) by J. Numata (沼田次郎), *Kômôbunkasiwa* (紅毛文化史話) by C. Okamura (岡村千曳), many monographs by S. Sato (佐藤昌介), and many discovered resources of some clans. Thanks to these

achievements, we take up some points and examine the studies of *Kazan* and *Kokan* on the western learning, especially *Kazan's*, among those who criticized the politics and society of the day from each standpoint by their achievement of the western learning as a current of its history.

Development of the Vocational Education in the Later Meiji Period

by

Masaru Tokinoya

The modern educational system in Japan was better organized with the intensification of political control by the Meiji administration by which many, especially higher, educational institutions were established, to train the leaders of the new age. Therefore, there were many frictions and discrepancies between the European school educational system and the general public. This was much more accelerated by the fact that the public still lived in the feudalistic rural society. In this respect, there are many questions because of the close relation of the common life with the common education as well as the vocational education. As a part of the productive and industrial enterprise policy, the government endeavoured to foster the higher institutions of vocational education early in time, and established for the first time the lower vocational schools all over the country since the first industrial revolution after the Sino-Japanese War. Even in this case, in spite of the government's encouragement of establishing technical schools for the modern industry, actually agricultural schools commanded a majority and many of them were established as a supplement of elementary school curriculum. The discrepancies between one system and its actualization are remarkable in case of the rapid transplantation of advanced civilization.

The growth and reconstruction of the Yuaikai. (友愛会)

by

Takayoshi Matsuo

The Yuaikai, (友愛会) which had become afterwards the Japanese Federation of Labor, is the immediate ancestor of the labor move-